

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第34号 2021年6月1日 発行

目次

- | | |
|---|--|
| * 慶應義塾史展示館開設までの私的総括
(都倉武之)..... 2~7 | * 慶應義塾三田キャンパス模型製作報告
(白石大輝)..... 10・11 |
| * 福沢諭吉・慶應義塾史への間口を広げる
デジタルコンテンツ (横山寛) 8・9 | * スタッフ一覧..... 12 |

福沢諭吉が見た世界のこれから — 福沢諭吉記念慶應義塾史展示館がめざすもの —

当初の計画からちょうど1年遅れで、慶應義塾史展示館が開館する。この展示館は、単に慶應義塾という一つの私立学校の歴史を回顧する空間にとどまらない。その目的は、慶應義塾の歩みおよびその創立者である福沢諭吉の生涯を通して、日本そして世界の近代の歩みを見つめ直し未来を考える場となることである。

この展示館で重要な意味を込めた一つの絵をここに掲げる。『西洋事情』初編(1866年)の扉絵である。地球上に電柱が立ち並び、電線が張り巡らされ、その上を飛脚として擬人化された情報が駆けている。周囲には最新の文明の利器が描かれ、上部には「蒸気が人を濟け、電気が信を伝える」とある。

世界各地のモノが、人が、情報が、地球上を駆け巡る時代は何をもたらすか——。短期的には当然発展を促すこの潮流は、しかしやがて内外の人々の対立と分断を生み、それを激化させていくことを福沢は予期した。その困難な問題と如何に取り組み、そしてそれをどのように緩和しながら人々を幸福にすることができるか。福沢の、そして慶應義塾の課題はそこにあったのである。今日ますます根深い多くの問題への明快な答えはもちろんここにはない。しかし先人たちの思索と模索の痕と、多くの示唆がそこかしこに溢れていると断言したい。(都倉)



慶應義塾史展示館開設までの私的総括

都 倉 武 之

慶應義塾史展示館が開館する。これを書き始めた時点では2021年5月15日が開館予定であったが、5月11日を期限とする3度目の緊急事態宣言の発出で開館前の行事は見送りとなり、宣言の延長方針によって開館自体が延期となった。最後まですんなりと事が運ばないのは、この展示館の開設経緯を象徴するようで因縁を感じる。2007年10月に福沢研究センター（以下センター）に着任した筆者が、塾史展示館の実現までの事実関係として知るところを、この機会に整理しておきたい。

実現しなかった数々の幻

一般に教育機関における学校史の展示は年々盛んになっている。少子化の加速による受験生獲得競争の激化で、学校の魅力や価値を高める取り組みの一環であろう。しかし義塾は学校史の展示に消極的であり続けた。その理由は、「創立年の古さ」と「福沢の名前」だけで、十分歴史的プレゼンスをアピールでき、あえてその歴史的意義の発信に投資する必要はないという意識が、言外に教職員に共有されてきたのが原因ではなからうか。また実証と合理性を重んじた福沢の精神そのものが、福沢を絶対的な権威としかねない「展示」という行為を阻害したようにも思われる。

すでに『三田評論』(2020年8・9月号)に書いたように、過去の記録をたどってみると、福沢の生涯や塾史を展示しようとする構想は、少なくとも1937年、小泉信三塾長時代に具体化していた。実証と合理性が軽んじられていく時代に対抗するという意味での、時代の要請であったかもしれない。しかしその計画は戦争による物資統制の影響で頓挫。戦後も潮田江次塾長時代にすぐに計画が再浮上しているが、戦災による研究室不足への対応が優先されて第二研究室（新万来舎）に変更された。

1958年の義塾創立100年の際、記念事業に福沢記念館建設が盛り込まれた。その機運醸成のために、三越社長の岩瀬英一郎氏の支援で大がかりな福沢展が開催され、岩瀬が建設費と数年先までの維持費の負担を申し出て設計図が引かれた。しかし、当の岩瀬の急逝で見合わせとなってしまった。

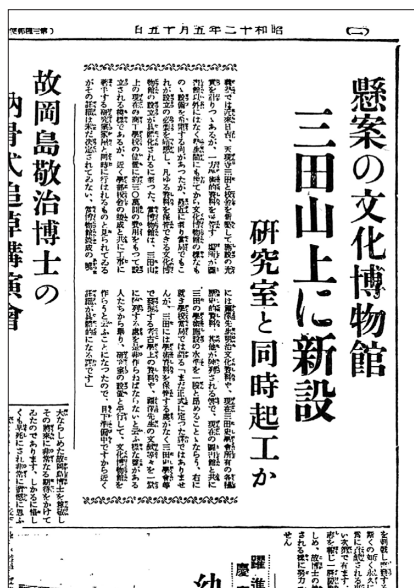
1983年の石川忠雄塾長時代の創立125年記念事業では、福沢研究センター設立に展示構想も盛り込まれており、「塾内外への所蔵資料の公開展示」を目指すことが明記されていた（『三田評論』858号）。図書館旧館に入ってすぐ右側、センターの向かいの部屋が「展示室」と呼ばれ、展示ケースを備えていたが、その部屋は会議室として管理されており、一般公開に至ることはなかった。

1997年、鳥居泰彦塾長時代には、高橋潤二郎常任理事のもと、文学部民族学考古学研究室、アート・センター、幼稚舎とともにセンターが所蔵資料の実物展示やバーチャル展示の検討を進めたが見送られた。

安西祐一郎塾長時代、2008年の義塾創立150年の記念事業計画策定にあたっては、図書館旧館を博物館とし、アート・センターと福沢研究センターが建物に入るといった計画が立案されたが不採用となった。

筆者が直接記憶するところでは、安西塾長時代、150年事業による三田南校舎建て替えの際、服部禮次郎氏の寄付で展示スペースを設ける計画があった。しかしそれは結局また見送られ、寄付は再び「万来舎」（という名前の、卒業生用のサロン）に転じた（この経緯があったので、2011年に竣工した新南校舎内の社中交歓万来舎には、ごくわずかながら展示機能が備えられた）。

2009年1月、安西塾長の最後の年頭挨拶では「旧図書館をどうしていけばいいのか……義塾に、世界に誇る福沢精神の原点を、誰の目にもわかるようにすることのできるミュージアムが必要なのではないか」という意見があ



福沢資料や考古学資料の展示館計画を報じる『三田新聞』(1937年5月15日)

ります。これから時間はかかると思いますが、旧図書館やミュージアムをどうしていけばいいのかといったことも、考えていかなければいけない時期になったように思います」との言及が含まれていたことが印象に残っている(『慶應義塾報』2176号)。またも先送りされた宿題の確認だったのだろうか。

KeMCo 開設経緯との交点

このように何度も立ち消えた計画を遂に実現に導いた推進力は何であったか。一つには慶應義塾ミュージアム・コモンズ(KeMCo)の設立に繋がる流れがある。KeMCoの原点は、そもそもセンチュリー文化財団が安西塾長時代最末期の2009年2月に慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に資料1740点を寄託したことである(この経緯については佐々木孝浩「センチュリー赤尾コレクションとの12年」、『文字景——センチュリー赤尾コレクションの名品にみる文と象』図録、2021年)。寄託の条件に定期的な展示が含まれていたことから、これを起点として学術資料の保管や展示の検討が急務となり、同年5月発足の清家篤塾長の義塾新執行部に引き継がれた。所管する学事・施設担当は、直前まで斯道文庫長だった長谷山彰常任理事で、大学におけるLMA(Library/Museum/Archives)整備の推進を力説。これに触発されるように、メディアセンター(以下図書館)・斯道文庫・文学部民族学考古学研究室(以下民考)・アート・センター・福沢研究センターといった学術資料を持つ部門が、資料の収蔵環境整備や展示・公開を目指して動きを活発化した。どのような動きがあったか、記憶の限りで列挙する。

- ① 図書館が書庫不足解消のための大型保存書庫を執行部へ要望することを計画。実現したら共同利用部分を設けるとの前提で、この動きに連動し、福沢研究センターとして収蔵・閲覧・展示施設を要望する24ページの要望書を起案し長谷山理事に提出した(2009年12月16日)。
- ② 2010年1月、旧経営管理研究科(ビジネススクール)校舎(現日吉西別館)を「総合学術資料センター(仮称)」に改修する計画が長谷山理事の主導で動きだし、学術資料を所蔵する諸部門がそれぞれ希望をまとめて提出(2010年3月23日)。その結果、旧校舎はセンター・民考・斯道文庫・アート・センターが共同利用する資料庫となり、同時に資料のデジタル化とも連動することが構想されて、2011年10月デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター(DMC)が三田西別館から日吉西別館に移転した。この施設に常設展示を行う案もあったが見送られ、展示のあり方について意見交換が継続された。
- ③ 図書館は①に記した大型書庫の希望があったが、条件が合わないとして②への参加を見送り、独自の書庫新設を模索、白楽サテライト・ライブラリーの閉館決定(2013年10月)、山中資料センター2号棟竣工(2016年9月)へと繋がった。
- ④ 2012年の図書館開館100年を前に、貴重書の展示などを目的に三田の図書館内1階のPCエリア跡に展示室をつくる計画が2010年秋に浮上した。他部門も利用できる計画で、民考・斯道文庫・センターも共同要望に賛同。この結果、2011年10月に展示室がオープンした。
- ⑤ 2009年の博物館法施行規則の改正により、学芸員養成課程を持つ義塾は、博物館相当施設を整備しないと、博物館学実習などの授業に影響が出ることとなった。これに対して2010年晩秋、アート・センターが独自の展示施設の開設を求めて動き、2011年9月の三田南別館へのアート・スペース開設に至った。センターらはこの動きに関与していなかった。開設後は、最初の展示「記憶の南校舎」展から展示資料出品に協力。
- ⑥ 2013~17年にかけてDMCを拠点に文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」のプロジェクトが発足、松田隆美さんを代表に、三田から安藤広道さん、渡部葉子さん、本間友さんらと共に筆者が参加し、学術資料をデジタル・アナログ融合型で展示・発信していくあり方が、それぞれが提案した小プロジェクトを素材として多様に議論された。ここで練られたMoSaICプロジェクトーデジタルデータの文脈表現をデジタル化する試みのコンセプトは、展示館のデジタルコンテンツ「社中Who's Who」に活かされた。また筆者のプロジェクトで作成した「慶應義塾と戦争」アーカイブのデータベースは、2021年5月KEIO OBJECT HUBに接続された。
- ⑦ DMCによる連携を基盤として、2016年イギリスのオンライン教育プラットフォームFuturelearnによるコース提供を慶應義塾が開始した。福沢関係コンテンツも当初からリストアップされ、企画検討に筆者が参加。

これら諸部門の連携の蓄積が基盤となり、2016年春のセンチュリー文化財団所蔵資料一括寄贈と寄付の申し出への対処を検討する長谷山理事の下での「学術資料展示施設検討小委員会(仮称)」に繋がっていった。

福沢研究センターによる展示の蓄積

次にセンターに関わる展示という視点で見てみよう。21世紀に入って以降、本格的な福沢・塾史関係の展示としては2001年1月の福沢没後100年記念「世紀をつらぬく福沢諭吉」展（銀座・和光ホール）があった。この展示は大阪へも巡回した（同年8月、梅田・阪急百貨店）。この時は、慶應義塾の主催で、実行委員会の方式がとられ、資料の多くは福沢研究センターが出品したが、展覧会のコーディネートはアート・センターが主導した。

福沢研究センターによる展示としては、毎年1月10日の福沢先生誕生記念会の当日、1日限りで来場者に福沢関係資料が展示されてきた歴史がある。これは福沢の没後始まった記念会の会場内に、福沢の書や遺品を展示していたことに端を発し、これが飲食を伴う祝賀会場から分離され、2007年より、図書館旧館の旧展示室（2021年、新たにカフェが開設された部屋）で行われるようになったものである。近年は、福沢研究センターが直近の1年間に新たに入手した資料を初披露する機会として恒例化していた。

筆者が直接関わった展示としては、2008年の三田キャンパスにおける「小泉信三展」から話を始める必要がある。この展覧会計画は筆者がセンターに着任する以前から関わっていた小泉妙さん（小泉信三次女）の聞き取り調査過程で浮上、小泉没後40年（2006年）の予定が延びて生誕120年記念として実現を見たのが2008年5月のことだった。図書館旧館2階大会議室を特設会場とした本格的な展覧会開催はこれが初めてで、2週間あまりの会期で1万2000人の来場者を数えた（同会場はその後2010年10月に「三田文学創刊100年展」、同年11月に斯道文庫開設50年記念「書誌学展」の会場となり、小泉展の展示用資材が再利用された）。山内慶太さんや神吉創二さんの教えを乞いながら、筆者が初めて組み立てに参加した展示であった。



旧図書館大会議室を会場とした「小泉信三展」の内覧会（2008年5月）

そして2009年1月から9月にかけては、義塾創立150年記念として東京国立博物館、福岡市美術館、大阪市立美術館での「未来をひらく福沢諭吉」展および神奈川県立歴史博物館での「福沢諭吉と神奈川」展が行われた。この時も慶應義塾主催で、アート・センター所長の前田富士男さんが実質的な実行委員長役、福沢資料のコーディネートについては基本的に筆者が担当した。



上野の東京国立博物館表慶館を会場とした「未来をひらく福沢諭吉」展（2009年1月）

小泉・福沢の両展示は、展示者の意図が、来場者どのように伝わるかを考える機会となった。たとえば、「実学」に「サイヤンス」とフリガナが付いた福沢の自筆原稿「慶應義塾紀事」は、福沢研究者の間ではある程度知られていたものの、それほど一般的に知られていた資料とはいえなかった。当時塾内では「実学」という言葉がどちらかという「実用的学問」という文脈で使われがちで、センター内でもよくその点が話題になっていたことから、「慶應義塾紀事」の展示を計画の最終段階で追加した。展示品としては説明的でわかりにくいという異論もあって削除要望が出た記憶があるが、最終的には石坂浩二さんの音声ガイドまでつけた。東京国立博物館での福沢展が3月に閉幕し、その翌月選出された清家新塾長が、最初に就任の抱負を述べた文書には、福沢が「『実学』にサイヤンスとルジをふっておられます」との言及があり、表題は「実学の精神に立って考える」（『慶應義塾報』付録136号）であった。そしてその後、「サイヤンス」は清家政権のキーワードの一つとなった。これはあるいは偶然だったかも知れないが、学術論文とは違う展示の訴求力を考えた出来事であった。また、展覧会を行うことで社会的な関心が喚起され、資料の情報が集まってくることを体感し、巡回先の各地で、様々な資料との出会いがあった。さらに歴史資料が、単に文字情報を伝

える媒体としてではなく、モノとして面白いことに開眼した。この視点は『三田評論』のMONO MUSEUMという連載(2009年1月～13年12月)に繋がり、さらに2013年8月、「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの開始へと接続した。

創立150年展を経た新たな展開

慶應義塾150年の歴史の展示も包含することになってきた2009年の福沢展の際苦労したのが、福沢没後の慶應義塾史資料、とりわけ戦争期の資料の不足で、その欠を補うための資料収集を企図した活動が「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトである。『慶應義塾百年史』編纂後の資料収集が不十分であることを理由に義塾150年史編纂が見送られた経緯も念頭にあった。戦後70年にむけて「戦争体験の継承」が社会的な焦点となる中で、一次史料の収集に重点を置いたことは、案外社会的な関心を集めた。

収集状況を公にする機会として2013年12月に「慶應義塾の昭和十八年」展、2014年10月に「残されたモノ、ことば、人々」展、2015年6月～7月に「慶應義塾の昭和二十年」展と、3年連続で三田のアート・スペースと図書館展示室の2会場連携で展示を行った。この経験は、アート・センターとの協力体制を確立し、また図書館スペシャルコレクション担当倉持隆さんをはじめとして貴重書室とも連携を円滑にした。その後、2016年7月、2017年7月には従来1月10日に行っていたセンターの新収資料展を図書館展示室でそれぞれ1か月の会期で開催(戦争プロジェクトの収集資料展示を兼ねる)。さらに2018年6月には「積宗演と近代日本」展をアート・スペース、図書館展示室の2会場連携で、円覚寺との共催により開催した。積宗演展は、福沢門下の山並みの一端を深掘りして新たな視点を生み出す機会となり、従来の展示とは一線を画する試みであった。



「残されたモノ・ことば・人々」展
ギャラリートーク(2014年10月)

上記の年1回ペースの展示とは別に、2013年6月、横浜初等部の開校記念式にあわせ、初等部図書室内に福沢・塾史を展示する展示室「福沢先生ミュージアム」が設置されることとなり、山内慶太郎長の協力依頼を受け、展示企画立案に参加。センターより展示資料を貸与した。アート・センターにも協力をお願いし、設備面での助言や展示作業の協力を得た。

戦争展は三田を飛び出し、2016年3月「戦争の時代と大学」展、2019年7月～8月「忘れられた戦争のカケラ」展の2回、慶應大阪シティキャンパスでも開催した。

2017年11月には、三田キャンパス東館8階で、体育会創立125年記念展「近代日本と慶應スポーツ」を開催した(この時もアート・センターに多くの支援を得た)。体育会展もまた従来センターでは手薄で気になっていたスポーツ関係の資料を調査するタイミングとなり、オリンピックメダルをはじめとして、数々の重要資料の収蔵を実現できた。これを契機に横山寛さんによる『三田ジャーナル』での「シリーズ 慶應義塾とスポーツ」(2018年1月～)や『三田評論』での「慶應義塾体育会の軌跡」(2020年4月～)などの慶應スポーツ史連載が始まり、今までほとんど知られていなかった「日本スポーツ史上の慶應義塾」という視点が丹念に掘り起こされていることも、これから意義を増すであろう。

これらの蓄積が、福沢や慶應義塾史に特化した展示施設開設の機運を下支えしたという自負はある。

塾史常設展示構想の浮上

塾史展示館へと繋がる最後のスイッチが入ったのはいつか。実は現時点ではこのことを正確に把握できていない。ただ実感としては、2015年3月5日の清家篤塾長のハーバード大学訪問はそのプロローグとして想起される。これは慶應義塾がハーバード大学の援助を得て1890年に学部を創設した故事にちなみ、塾長以下教職員11名がハーバード大学を訪問して125年前の厚意に感謝の意を表するという企画で、直前に採択された「スーパーグローバル」事業の一環に加えられた。筆者は両校の125年前の縁を解説する動画の作成に携わったことをきっかけにメンバーに加わる好運を得た。歴史的寒波に見舞われた雪深いケンブリッジで、一行はキャンパスツアーを経て大学文書館に案内され、ハーバード大学エリオット総長に宛てられた福沢諭吉の英文書簡を見た。また1936年のハーバード大学300年祭に小泉信三塾長が自ら出席して持参したお土産の『西洋事情』版木も大切に保管されていた。文書館に保管された慶應義塾に関する資料は戦後のものにも及び、行き届いていた。125年前の縁を背景とした訪問団に、その後125年の両校の歴史の蓄積

を示す資料の展示で応えてくれたハーバードのおもてなしに一同はいたく感激したのである。その日の夜、筆者が宿からセンターのスタッフに送ったメールには、こう書かれていた。「アーカイブや展示施設の重要性が再認識され、慶應も何とかしましょうよという話題が頻りでした。」



ハーバード大文書館で福沢書簡を見る清家塾長
(2015年3月、筆者撮影)

この年、様々なことが堰を切ったように動き出した。図書館旧館の耐震性が問題となり、改修工事に入ることが決まったのは夏頃であった。これはキャンパス内の建築の耐震化で最後まで残っていた大きな宿題に、財政健全化に取り組んだ清家塾長政権の最後に手を付けたというタイミングだったようなのだが、この時同時に2階の大会議室を塾史展示施設とする構想が急に聞こえ始めた。手許の記録を確認すると、学術資料を持っている諸部門が長谷山理事の招集で非公式な懇談会を2回持ったのは2015年10月で、この時、塾史を展示する施設を図書館旧館につくることの一定の合意が形成された。今回の工事は耐震化と外装の修復に限定され、内部は基本的に手を付けない(指定品レベルの十分な展示環境はつくれない)ことになっていた。そのことが、展示内容を塾史に限定することを後押しした側面があった。

KeMCo 開設へと繋がるセンチュリー文化財団の寄付に関する検討のための「学術資料展示施設検討小委員会(仮称)」が最初に招集されたのは、2016年4月のことで、その第1回会合では、上記の非公式懇談会の際に筆者が提出した「展示施設計画試案」が参考資料として配付され、旧図書館の展示室は「塾史博、福沢博的な存在」としてすでに「予定されている」ものとなっていた。

最後のスイッチがいつ押されたのかはともかくとして、独自の水源地を持ちつつ、同じ潮流に湧き出た2つの施設 KeMCo と塾史展示館は、「ツインタワー」「双子の

展示施設」として、今日位置づけられるに至るのである。

不測の事態の連続

しかし、これ以降は、またしても悪い因縁が芽を出したのだろうか。「塾史展示室(仮称)」と呼ばれるようになったプロジェクトは、準備のための組織作りが進まず、KeMCo の会議だけは着実に進行する中、ただただ時間が過ぎた。思うに、「塾史展示室(仮称)」は、時に塾内の展示施設の一つという位置づけで、それらのハブとしての KeMCo に包羅される対象と認識されたり、時に別個独立の「双子」の片方と認識されたりと(実際開設のための予算は完全に独立)、位置づけが一見曖昧であったことが、全て裏目に出たということであろう。これまでの経緯から、センター内では基本的に筆者が担当しているという事実状態だけが継続した。プランニングを担当するトータルメディア開発研究所との打ち合わせが待たなしとなってようやく検討が本格化したのは2019年11月になってからだった。

この時点では、開館予定は2020年7月だった。これは東京オリンピックまでに開館、が至上命題とされていたからである。KeMCo は、展示施設としての開館はオリンピックに間に合わないが、建物は竣工し塾史展示の開館と同時に建物内覧だけは可能にする予定だった。そして、学術資料を持つ諸部門がそれぞれ資料を出し合う「連携展」を三田の図書館新館内の展示室やアート・スペースと一斉に行くことを準備していた。ところが、KeMCo の建築資材を製造していた鉄骨工場が2019年10月の豪雨による千曲川決壊の被害を受け、KeMCo の工事完了が2020年8月上旬に遅延する見込みとなった。それに伴って塾史の開館も連携展も、すべて2020年10月に延期という方針が決定された。この頃は、まさかオリンピックを追い抜くことになるとは夢にも思わず落胆したものである。

しかし今から思えば、日程的にはかなり無理があったし、人的にもどだい無理な準備体制であった。ある程度福沢や塾史の知識があり、センターの資料についても知っていて展示の中身の検討に実質的に加わってもらえる状況にあったのは、アルバイト待遇で週に数回出勤している白石大輝さんと横山寛さんだった。同時並行でグラフィック、映像、デジタルコンテンツ、模型の4つのプロジェクトが進みはじめ、毎週水曜日、13時から2時間ずつ2プロジェクト(時には3つ)の打ち合わせが開始された。三田キャンパス模型は白石さん、デジタルコンテンツは3人で分担、他のコンテンツは横山さんにサ

ポートしてもらいながら筆者が担当して歩み出した。また、グローバル本部の英訳チーム（通称Kトラ）の全面協力による英訳の作業も始まった。サポートで調査員の中村亮さんと柄越祥子さんにも一部加わってもらった。デジタルコンテンツ準備のために、白石・横山・都倉が三田の春日旅館に宿泊して2泊3日の「合宿」作業を2度実施したのは2020年2月、3月のことだった。

それからである。コロナ危機に突入した。最初の非常事態宣言発出によりキャンパスが閉鎖となった2020年4月上旬からはリモートで業者との打ち合わせを継続したが、5月からはたびたび出勤した。人影のない三田の中庭に生えた雑草の神々しさは忘れられない。学生が踏まない三田第一校舎前には薄く苔が生え、「ラピュタ」を想起した。そのような中で展示館の内装工事は6月に実施。解説文を書くための文献も、それに添える画像も自由に手配できない中でグラフィックデザインの編集は大きく遅延してしまい、その貼り込み工事は9月上旬となった。この頃には10月開館はもちろん見送りとなり、冬の再流行（第3波）を予期して「2021年春」の一般公開と決定。開館日は、福沢のウェーランド経済書講述の逸話にちなみ、5月15日に設定した。さらに第1回企画展は、準備していた「慶應義塾とオリンピック」展から、ウェーランド経済書講述の日、すなわち慶応4年5月15日をテーマとすることに変更、開幕期日を常設展の開館とずらし、7月5日と定めた（慶応4年5月15日を西暦換算した1868年7月4日にちなむ）。



キャンパス閉鎖中に行われたグラフィックの確認作業
(2020年7月)

これらの作業の一方では、リモートの授業なども行っており、本当に疲労困憊してしまった。そこで塾長室に窮状を訴え、主として事務の諸部門から代表者に参加して頂き、塾史展示館開設準備室を作ってもらうことになり、2020年7月1日にそれができた。会合が持たれた

のはたった2回だったが、何よりも当事者意識の共有者が増えた安心感は大きく、英訳の補助に商学部のジェフリー・クラシゲさんが加わってくれたことも心強かった。なお、工務課で一貫してこの工事を担当し、展示の内容面でも三田キャンパス模型の図面まで引いて助けて下さったのは渡辺浩史さんだった。最後の最後まで難航した常設展示内の三田キャンパス模型は、2021年6月30日まで修正作業が行われる。

前途果たして如何に…？

困難の末の開館は、まだお預けだった。もう一つやってきた試練は、コロナの第4波であった。本格的に対面授業が再開した2021年度の新学期開始以降、感染者数が再び上昇に転じ、感染力の強い変異株の拡大への警戒により3回目の緊急事態宣言が東京に発出されたのは4月25日で、その期限は5月11日であった。開館式予定日の5月12日は解除後になる予定だったが、延長の可能性は濃厚で、結局ゴールデンウィーク明けに延長見通しが報じられたことから再び延期を決断することとなった。ただし、当初の一般公開予定日であった5月15日に、長谷山塾長以下、ごく少数の関係者を集めての「完成式」を行ったのである。

塾史展示館は、こうして「完成」を迎えた。今これを書いている時点では、企画展に合わせた7月5日に開館式および一般公開を行う日程で準備を進めている。実に実に一筋縄ではいかない道のりも、ゴールテープは見えたものと信じたい。

今後、未永くこの展示館を維持することもまた、容易なことではない。安定的な学芸業務体制は確保できていない。専任職員は1人もいない。バックヤードの空間も十分とはいえない。企画展示室での定期的な企画展開催は、ある程度の学芸業務体制を前提としていたがそれが無い中での企画継続は過酷である。常設展示室も必ずしも良好な環境とはいえないので、常設といえど展示資料は入れ替えていく必要がある。その意味では常設展も実質的には会期の長い企画展であり、厳しい道のりとなる。

福沢と塾史を展示するというこの事業が、最初の計画から数えれば85年の月日を経ていよいよ船出するに当たり、ここまで推進した責任のある立場からすると、なおこれから続く困難を思うと茫然とする気持ちもないわけではない。しかしこの事業に価値があることを信じ、一歩ずつ進むしかないという覚悟を新たにして、この筆を擱くこととする。

福沢諭吉・慶應義塾史への間口を広げるデジタルコンテンツ ーオリジナルアプリの開発

福沢諭吉記念慶應義塾史展示館 横山 寛
専門員

福沢諭吉記念慶應義塾史展示館は塾生・塾員だけでなく、すべての人に開かれた展示施設で、興味を持ったすべての人にとっての学びの場となることを目的としている。そうした意図で様々なトピックスを盛り込んだ展示グラフィックは構想された。同じ観点からルビも中学校以上で習う漢字へ振ることを基本とし、小学生は少し背伸びして、中学生はルビを辿ることで一通り読むことが可能となっている。幅広い人々に自ら積極的に触れてもらうことを意識した結果である。

そしてその最たる例がデジタルコンテンツである。今回、福沢諭吉・慶應義塾史に関する様々なトピックスについて自ら操作しながら閲覧できるよう、株式会社電算システムと共同で展示館専用のアプリを開発した。それが「福沢諭吉世界を駆ける」「言葉で戦う福沢諭吉」「近現代史の中の慶應義塾生」「社中 Who's Who」の4つである。

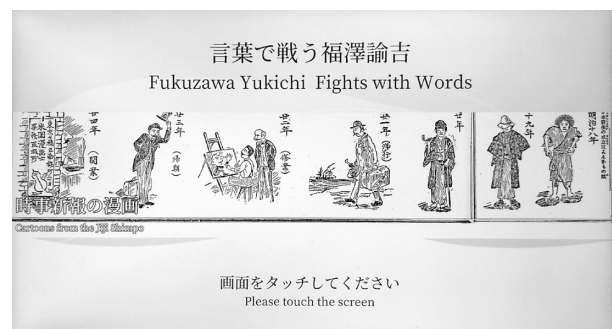
福沢諭吉世界を駆ける

福沢の誕生から修学時代を主に扱う颯々の章にはアプリ「福沢諭吉世界を駆ける」を設置した。これには「福沢諭吉が海外で訪れた場所」「福沢諭吉の写真」「福沢諭吉関連国内史跡」の3つのボタンが用意されている。福沢の洋行の足跡は「西航記」、「西航手帳」、「慶應三年日記」等で知ることができ、関連書籍も複数出版されている。「福沢諭吉が海外で訪れた場所」では、それらをもとにアメリカやヨーロッパで福沢が訪れた場所の写真を紹介した。これにより福沢の洋行が視覚的に具体的なイメージをもって浮かび上がるだろう。「福沢諭吉関連国内史跡」はその国内バージョンで、東京、中津、大阪、長崎などの関連史跡が見られる。また福沢は同時代人に比して実に多くの写真が残っている。「福沢諭吉の写真」はそれらを一堂に集めたもので、幕末から晩年までのポートレート、アメリカやヨーロッパで写したものの、家族や塾生たちとのものなど様々な写真を総攬できる。

言葉で戦う福沢諭吉

慶應義塾の開校から福沢の晩年までを扱った智勇の章には、アプリ「言葉で戦う福沢諭吉」を用意した。これは福沢の言論活動に焦点をあてたもので、「福沢諭吉全

著作」「時事新報の広告」「時事新報の漫画」の3つのボタンがある。「福沢諭吉全著作」は福沢の刊行した著書の一覧で、それぞれの表紙と概要が一望できる。また著作とともに福沢の主要な言論活動の場となったのが『時事新報』で、ここでは視覚的な効果に焦点を当てた。「時事新報の広告」では『三田評論』に掲載された『時事新報』の広告や引き札を閲覧できる。広告宣伝にも力を入れていた『時事新報』は、自社の宣伝についても趣向を凝らし、キャッチコピーや様々なイラストを用いてその有用性を伝えている。「時事新報の漫画」は福沢存命時に掲載されたものをピックアップした。漫画のほとんどは無署名だが、なかにはI・HやY・Kitazawaというように、今泉一瓢(秀太郎)や北沢楽天(保次)と思われるクレジットが添えられたものもある。『団々珍聞』など政治や社会を風刺した漫画が主流を占めるなかで、『時事新報』は風刺だけでなく、純粋に見て楽しむ漫画を多く掲載したところに特徴があり、ここでもそれらを多く閲覧できる。



「言葉で戦う福沢諭吉」のホーム画面

近現代史の中の慶應義塾生

福沢没後の義塾の歩みを紹介する独立自尊の章には、アプリ「近現代史の中の慶應義塾生」を用意した。スペースの限られた常設展示室で160年におよぶ慶應義塾の歴史を満遍なく紹介することは難しく、またトピックごとに区切られた総花的なものは避けた結果、福沢の生きた19世紀の割合が大きく、20世紀以降については駆け足で紹介する形にならざるを得なかった。このアプリはその空白を少しでも埋めることを意識し、「慶應義塾生の

風俗と日常」「イラストで見る慶應義塾生」「慶應義塾関係戦没者データベース」の3つのボタンを設けた。

「慶應義塾生の風俗と日常」は写真で塾生塾員の様々なシーンを振り返る。ここでは1枚でその時代の特徴を語るものを選ぶように心がけた。たとえば教室にあふれるほど学生のひしめく理材科に対し、こぢんまりとした法律科・政治科の授業風景は、明治～大正期の大学部における圧倒的な理材科の学生数を物語り、福沢以来の理財を重視する伝統が一目で感じられるだろう。戦後の日吉キャンパスの何気ない1枚からも、空襲に備えて迷彩に塗られた校舎のカムフラージュや米軍の接收の痕跡などが見て取れる。また入学式から運動会、各種学園祭、卒業式までの年間行事を様々な年代を取り混ぜた形で盛り込むなど、単調にならない工夫も施した。



「慶應義塾生の風俗と日常」のコンテンツ詳細画面

写真が目に見える風景や学生文化を伝える一方、写真では伝わってこない文化もある。その視覚的な把握を狙ったのが「イラストで見る慶應義塾生」で、『風俗画報』『時事新報』『三田新聞』『予科会誌』『慶應義塾大学報』など明治期から現代までの新聞・雑誌等に掲載されたイラストを中心に紹介する。これらからは塾生のイメージや塾生文化などがうかがえる。たとえば『予科会誌』に掲載された、ノート集めなど試験にまつわるネタをモチーフとした塾生自身によるイラストは、100年前もいまと変わらない光景が広がっていたことを実感させるだろう。

3つ目の「慶應義塾関係戦没者データベース」は白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』の情報を中心にデータベース化したもので、データ自体は福沢研究センターでの改訂作業を反映した最新版となっている。ここまで紹介した各アプリは共通のシステムを利用し、コンテンツを入れ替えて運用しているが、このデータベースは全く別の専用システムである。名前のほか、戦没年月日、戦没場所、卒業年、クラブなどから検索可能で、「軍医」、「シベリア抑留による死者」、「インパール作戦」、「硫黄島の戦い」といった詳細な検索項

目もある。それらを選択することでリストが絞り込まれ、最後は戦没者一人ひとりの情報も表示され、詳細を確認できる。

社中 Who's Who

「社中 Who's Who」は、福沢の親類や友人および現代までの塾員を中心とした慶應義塾関係者（物故者）を紹介する人物データベースで、完全オリジナルのアプリとして開発された。2つのタッチパネル型スクリーン上に肖像アイコンがランダムに漂い、各アイコンに触れると詳細画面が開きその人物を紹介する仕組みとなっている。また出身地や職業などの属性をもとに人物を呼び出すことも可能で、収録された多様な人物から慶應義塾の社中の広がりを感じることができるコンテンツである。

運用の展望と課題

以上が開館時の4つのデジタルコンテンツの概要である（「慶應義塾関係戦没者データベース」と「社中 Who's Who」については『三田評論』2021年4月号も参照）。開館後は随時更新可能であるというデジタルコンテンツの利点を生かした運用もしてみたい。例えば社中 Who's Who を企画展と連動させ、期間限定で企画展のボタンをつくれれば、関連人物をまとめて表示することができる。その他のアプリも同様にコンテンツを入れ替えることで全く新しい内容として「展示替え」が可能である。

一方でデジタルコンテンツ制作に当たっては悩ましい問題もある。一例を挙げれば、社中 Who's Who の収録人物の生年は江戸時代から昭和までと幅が広く、これらをデジタル上の統一の規格で表現するには割り切りも必要だった。たとえば出身地はすべて現代の表記に統一し、都道府県＋市町村の表記を基本とした。その結果、旧藩出身者であっても〇〇県〇〇市出身というような表記にせざるを得なかった。展示としては厳密性にこだわりたいが、その追求がデジタル上で大量に表現する利点と相反してしまうというジレンマであった。デジタル処理に基づく画一的表現と個別具体的な表現のバランスをどのようにとるかは課題として残されており、運用のなかで最適なバランスを探っていきたい。

このようにデジタルコンテンツにはいまだ検討すべき課題もある。しかしその扱うコンテンツの多様性から、見学者への間口を広げるという意味では大いに利点があると思われる。福沢諭吉・慶應義塾史へ関心を持つきっかけや新たな気づきを得られるコンテンツとなるよう期待したい。

慶應義塾三田キャンパス模型製作報告

福沢研究センター調査員 白石大輝

福沢諭吉記念慶應義塾史展示館の常設展示には、今から100年ほど前の大正12(1923)年頃の慶應義塾三田キャンパスを再現した模型がある。三田山上と、現在生協などがある西側低地にあった幼稚舎、現・中等部の位置にあった普通部を含めた範囲が1.2メートル四方の台の上に1/285スケールで再現されている。当時存在した代表的な建物としては、煉瓦造の旧塾監局(福沢の親戚でジョサイア・コンドル門下生の藤本寿吉設計)、現在も残る図書館旧館、入学式などの式典や、アインシュタインら著名人の講演会などのイベントで使用された大講堂、そして校舎としては当時珍しい鉄筋コンクリート造であった大学予科校舎(いずれも曾禰中條建築事務所設計)が挙げられ、これらを除くほとんどの建物は木造であった。そして、今は稲荷山にひっそりと佇む演説館も、当時は図書館旧館と旧塾監局に挟まれる形で建っていた。三田キャンパスは大正12年以降、関東大震災、キャンパス南側の道路開削、そして空襲など、多くの変貌の契機を経て現在に至っており、模型での再現には多くの困難が伴った。



製作の参考とした航空写真(大正12年ごろ)

製作の方針

この模型展示には、慶應義塾の「ハード面」を伝承する存在としての意義を見出すことが出来る。塾内においては、福沢諭吉の思想、塾生文化といった慶應義塾の「ソフト面」に目が向けられ、その伝承や研究が盛んに行われている一方で、建物やキャンパスの様子といった「ハード面」における義塾の歴史的連続性を感じる機会はほとんど設けられてこなかった。そのため、模型として建物を具現化することで、昔の三田の雰囲気や立体的に感じられるようにし、塾史への多面的な関心を導くことを狙いとした。震災前の大正12年は演説館や図書館旧館といった現在も残る建物と、福沢存命の頃から建っていた現存しない建物が混在する時期であり、明治中期から現在までのキャンパスの歴史的なつながりを感じられ、かつ資料もある程度存在することからモデルの年代として選定された。模型製作の指示にあたっては、大学の博物館展示として設置するに相応しいクオリティを追求し、写真や文字資料から現時点で再現しうる限り精密でリアルなものとなるように心がけた。

製作における苦心

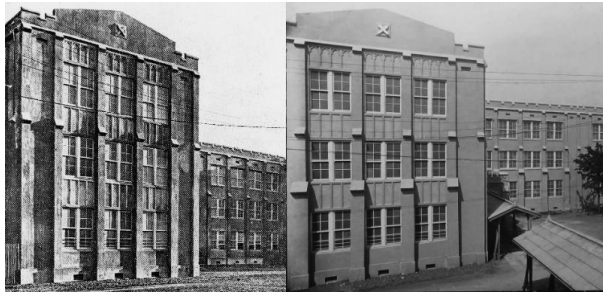
模型製作において重要となる建物の造形、寸法、彩色については、特定が困難なものが多かった。

まず、造形、寸法については当センターおよび塾監局管財部に所蔵されている図面や写真、映像資料を参考とし、画像からは様子が分からない箇所は、平面図と他の参照可能な情報に依拠して立面図を描いた。どうしても自力で再現困難な箇所は、管財部工務担当の渡辺浩史氏に図面を引いて頂いた。その中でも、福沢邸(キャンパス南東隅の福沢公園の場所)は、様々な年代の図面が多く残っていたものの改築を繰り返していることから、かえって整理を難航させ、最も再現が困難な建物であったが、可能な限り当時の姿に近づけることができたことを確信している。

彩色も同様に難航した。壁面の色は絵葉書や、大正・昭和期の幼稚舎生、普通部生、商工学校生の写生画が重要な参考材料となったが、装飾部分などの材質が判明しないものは、同時代の類似の建物を参考として決定した。

製作の中でも特に注意を払った点が、年代ごとの建物のわずかな差異である。写真を収集して見比べる中で、多

くの建物の変化が見つかった。例えば、現在の研究室棟付近にあった鉄筋校舎と呼ばれた建物は、大正9（1920）年に竣工し、大学予科、高等部等の校舎となった後、戦後には研究室として利用されたが、関東大震災の翌年の大正13（1924）年頃を境に、1階と2階の間の柱部分に三角状の突起が追加されている（写真参照）。『慶應義塾百年史』によると、同建物には震災の後に柱の補強と壁の修復が施されたとされ、この修復に伴う変化であると考えられる。そして、建物裏側も戦後にバルコニー部分が大幅に改造されている。他にも、旧塾監局の煙突には、竣工時にはカバーが取り付けられていたこと、現在の南館地階付近に存在した幼稚舎の寄宿舎の壁面が、建物移動に伴って改修されていたことなどが分かった。



鉄筋校舎竣工当時（大正9年）の姿（左側）と大正13年の修復後の姿（右側）。
模型では、修復前の姿を再現している。

見どころと今後の課題

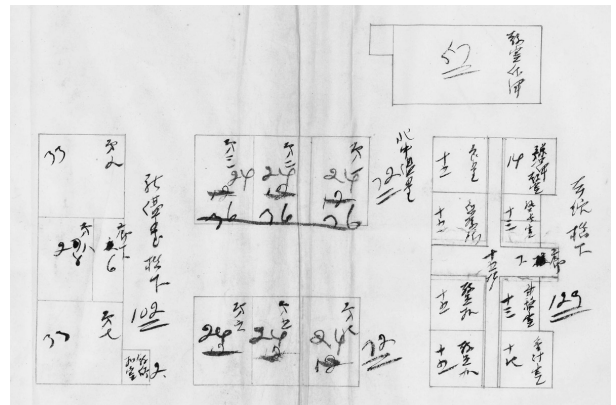
本展示では、建物外壁の横板の枚数や窓枠の色から電柱、樹木、石畳といった工作物の位置に至るまで、製作技術的に可能な範囲で詳細に再現した。今となっては知る人ぞ知る福沢邸から三田通り方向へのびるスロープや、稲荷山から山の下へのびる水路、中庭に今も残る大銀杏のほか、吉野秀雄の歌「図書館の前に沈丁咲くころは恋も試験も苦しかりにき」に登場する沈丁花や、佐藤春夫の詩「酒、歌、煙草、また女」にも詠まれた凌霄花（ノウゼンカズラ）も、開花時期はそれぞれ異なるが、再現している。位置が変わらない現存唯一の建物である旧図書館を目印として、キャンパス全体の変化を感じて頂き、さらには展示を見終わったその足でキャンパスを散歩して、先述の福沢邸へ繋がる通路の名残など、往時の姿を想像できる場所を見つける楽しみを味わって頂きたい。

そして、キャプションの解説を通じて慶應義塾の意外な建築史を知ること楽しみ方の一つであろう。三田の第一校舎建設に先立ち、昭和11（1936）年に大学教室等として使われた第一、二、四館が日吉へ移り、戦後一、二館は高等学校として、四館は再び三田に戻って中等部として利用された。同じく大学教室として使用された第六、七館も藤原工業大学（現・義塾理工学部）の校舎として昭和14（1939）年に日吉に移っている。来場者の中

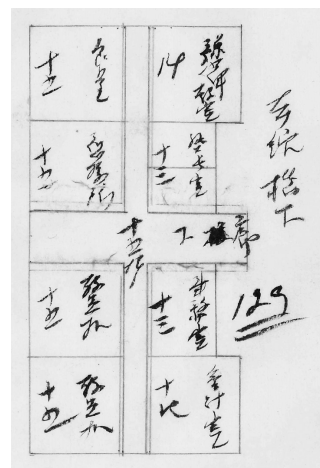
には実際にそれらの建物で学ばれた方もいらっしゃるであろう。校地拡張に伴い、校舎を再利用することで建築費を節約したものと思われ、特に戦後復興期の再移築・転用は、財政逼迫の中での一貫教育校再編を支える重要な役割を果たしていたと考えられる。

模型は完成したが、上述の通り、一部の建物は模型として再現するのに資料が不足しており、未だに詳細が掴めていない。特に、三田の山の南側の地形は、航空写真においても植栽のため、正確に把握することができない。建物・地形に関する情報や、写真などの資料をお持ちの方は是非ご教示頂きたい。

また、写真や図面の調査を行う過程では、「幻の門」こと旧正門の廃案となったデザイン案や、旧塾監局の各部屋の用途が記された簡素な間取り図などの興味深い資料が管財部や当センターから発見されたが、未だそれらを整理して建物の変遷を細かく分析するには至っていない。義塾の建築に関する研究は決して多くはなく、今回発見された資料を活用した塾史研究の展開が期待される。



旧塾監局、演説館、大学校舎の1階の間取り
（当センター所蔵「明治三十年十二月以降
学則改定願書綴 大学部及普通部」より）



旧塾監局1階の間取り（拡大画像）

❖ スタッフ一覧

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長	平野 隆	商学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授	戸村 理	東北大学高度教養教育・学生支援機構 高度教育開発室准教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授		同志社大学名誉教授
	住田孝太郎	福沢研究センター特任助教(有期)	西田 毅	東京大学名誉教授
所 員	朝倉 浩一	理工学部教授	平石 直昭	静岡県立大学助教
(兼運営委員)	井奥 成彦	文学部教授	平山 洋	田園調布学園大学教授
	池田 幸弘	経済学部教授	藤原 亮一	
	岩谷 十郎	法学部教授	前坊 洋	
	武林 亨	医学部教授	松岡 李奈	中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
	山内 慶太	看護医療学部教授	松沢 弘陽	
所 員	上野 大輔	文学部准教授	松田宏一郎	立教大学教授
	梅津 光弘	商学部教授	宮内 環	慶應義塾大学産業研究所兼任所員
	大久保健晴	法学部教授	宮村 治雄	
	大久保忠宗	普通部教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	太田 昭子	法学部教授	林 宗元	韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
	大塚 彰	志木高等学校教諭	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	小川原正道	法学部教授	Saucier, Marion	
	小山 太輝	幼稚舎教諭	Nguyen Thi	Hochiminh City University of Technology Lecturer
	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭	Hanh Thuc	
	末木 孝典	高等学校教諭	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	中西 聡	経済学部教授	Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
	馬場 国博	湘南藤沢中・高教諭		
	Millán Martin, Alberto	経済学部准教授		
	結城 大佑	女子高等学校教諭	研究嘱託	石井寿美世 石田 幸生 大庭 裕介 加藤 学陽 金沢 裕之 具 知會 小林 伸成 重田 麻紀 柄越 祥子 巫 碧秀 堀 和孝 三科 仁伸 山根 秋乃 横山 寛 吉岡 拓
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭	事務局	久我 竜二 事務長 竹屋 早月 主 務 内田 金蔵 主 務 飯島 典子 事務員 渋谷 彩佳 事務嘱託 西村 真由 事務嘱託 奥山 美樹 派遣職員 岡部 敏和 非常勤嘱託 柄越 祥子 非常勤嘱託
	小室 正紀	名誉教授		
	坂井 達朗	名誉教授		
	寺崎 修	名誉教授		
	松崎 欣一	名誉教諭		
	米山 光儀	名誉教授		
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授		
	飯田 泰三	法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授		
	區 建英	新潟国際情報大学教授		
	加藤 三明	慶應義塾名誉教諭		
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		
	川崎 勝			
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授		
	曾野 洋	四天王寺大学教授		
			他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、7名	

福沢諭吉記念慶應義塾史展示館 スタッフ一覧

館 長	平野 隆	福沢研究センター所長、商学部教授	小山 太輝	幼稚舎教諭
副館長	都倉 武之	福沢研究センター准教授	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭
所 員	西沢 直子	福沢研究センター教授	末木 孝典	高等学校教諭
(兼運営委員)			山内 慶太	看護医療学部教授
所 員	阿久沢武史	高等学校教諭	結城 大佑	女子高等学校教諭
	井奥 成彦	文学部教授		
	クラシガ, ジェフリー ヨシオ	商学部准教授	専門員	横山 寛
			事務局	福沢研究センター 兼務

(6月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第34号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2021年6月1日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印 刷 (有)梅沢印刷所